

野生動物管理に出会ってから 10 年間の軌跡

菅野 慎 (WMO)

私も最近はいさよと比べて時間が早く流れるような気がしている。そんな中ふと、自分は野生動物調査をするようになって何年経過したのかを数えたら、学生時代を含めて 10 年経っていた。正直、あっという間に 1 年が過ぎていく感覚があり、当時の記憶が薄れていくような気がして怖くなった。特に社会人として働き始めてからの異常な時間経過の速さと言ったら恐怖でしかない。あまり感じたことのない異質な恐怖を感じながら、この 10 年で得た経験や学び、感じたことを一区切りとしてまとめたい気持ちになった。大層な私歴ではないのだが、私が野生動物に関わって活動した 10 年間の軌跡をここで振り返りたいと思う。もし、読者に共感を与え、何かのきっかけになれば大変うれしい。

私自身、幼いころから野生動物に興味があったわけではなく、図鑑を読み漁ったり動物園に通ったりすることはなかった。おそらく、私の住んでいた家は、田畑で囲われた環境だったが、大型哺乳類が出没するわけでもなく珍しい動植物があったわけではないので、きっかけがなかったのだと思うし、実際に 18 歳まで住んでいて獣害なんてほとんど聞かなかった。いろんな農業被害現場を見てから自分の育った農地を見ると、野生動物被害がないなんて、とても平和で貴重であると今では思っている。高校生になって自分自身の進路を真剣に決める時期が来たとき、同級生が関東圏の都会の大学に進学を希望する中、私は都会に住むということに対して言語化不可能などとしても共感できない部分があり、実家より北側の東北か北海道に行きたいと思っていた。また、東日本大震災の被害を受けたこともあってか、環境問題に関する内容を学びたいと思い、漠然とした目標で北

海道の大学に入学した。大学の授業で学ぶにつれて、環境問題は多岐にわたり想像以上に複雑だったことが分かり、それまでは公害や自然破壊のような報道で取り上げられてきた側面しか見えていなかったが、動植物の衰退や過剰増加、外来種の侵入によって失われる自然があるとそこで初めてわかり、感銘を受けた。しかし、大学の実習では野生動物問題の上澄みに少し触れただけで、人間社会への具体的な被害や深刻さなど本質的な側面は十分に理解できず、「へー、そうなんだ。」というように自分とはあまり関係のない第三者視点で野生動物問題を見ていた気がする。おそらく、実家周辺は農地だったが、シカもイノシシもいなかったので、授業で習った野生動物被害と自分が育った環境の状況がまったく一致せず共感しづらかったからだろう。

大学 3 年生になって、研究室に配属される時期になったとき、私はひょんなことから野生動物に関する研究室に行きつくことになった。野生動物管理に関するノウハウを授けてくれたのはこの研究室の教授で、自分の人生が大きく変わったのはこの時期だったと思う。当時、研究室では植生調査、外来種対策、環境教育、哺乳類調査、鳥類調査、講演会、留学生対応、JICA 研修など野生動物に関する様々な調査や活動を実施しており、調査場所も調査内容ごとにばらばらだったためかなり忙しかった。また、私が研究室に配属された年度は第 5 回国際野生動物管理学会が札幌市で開催され、その運営の一部を任されていたのでさらに多忙だった。そんな多忙の中でも、教授は「おもしろいことをやる」をモットーにして学生を引っ張り、興味深い研究活動を北海道全域に展開していて、かなり力強く面白かった。野生動物に関

するいろんなことができた研究室だったが、私がしばしば同行していたのは北海道東部のエゾシカ調査で、ラムサール条約の日本国内初の登録湿地として有名な釧路湿原で爆発的に増加したシカ管理のための調査だった。初めて釧路湿原に行ったのは10月下旬で、樹林帯がほとんどなく一面に黄金色のヨシが密生し、秋風に揺られてさらさらと音を奏でていた。夕方になると、夕日が地平線まで沈み深紅の光で湿原一帯を照らすため、赤みがかった金色のヨシがさらにきれいで幻想的だった。そんなきれいな景色の中を大量のエゾシカが駆け回り、希少な湿原植物を踏み荒らして、よく見ると湿原内は獣道だらけだった。その日は野生動物調査を専門とする民間企業の調査員に同行し、専門業者用に建設された堤防道路を走行して、湿原内に生息するシカのライトセンサス調査をした。10月下旬とはいえ、横風が強く湿原は体感温度がとても低く感じられ、当時、安い防寒着しかなかった私は、衣類の隙間から入る冷気に凍えながらライトを振ってシカを数えていた。堤防道路沿いには無数のシカがいて、数十メートル進むたびにシカが飛び出してくる。そのためエゾシカを数えることに時間がかかった。たった数 km の距離で2時間半ほどかかってしまい、調査が終わったころには寒さで両手の感覚はなかった。翌日は前日の調査でシカの出没が多かった場所を中心に生体捕獲を実施した。思いのほか早くシカが捕まり、すぐさま GPS 発信器付き首輪を装着する作業に入った。麻酔が効いたシカになるべく負担を掛けないようにすべての作業が高速で実行され、必要以上の言葉は発さず張り詰めた空気間の中で黙々と作業が進む。私も補助の身だったが必死で指示された作業を進めた。プロの調査員を中心に作業しているため、滞りなく進むが一番大変なのは体重の計測だった。湿原のため足場がぬかるみ全く安定しないうえに、湿原に生息するエゾシカは周囲の餌資源が豊富なためかかなり肥えており、屈強な大人が4人がかりでヒイヒイ言いながら持ち上げてバネばかりを使って体重を計って

いた。結果、メスジカだったが体重は90kg以上あり、なかなか肥えていた。作業が終了した後、全員の肩の力が抜けて現場の緊張感が消えていた。そんなときふとある調査員の方は晴天の下、一面に広がる湿原を見ながら、この仕事のいいところは普段人が絶対に入れない場所に入って絶景を見ることができる場所だとおっしゃっていた。確かにそうだと共感し、何気なく言った言葉が今でも忘れられず、それから、自然風景を当たり前のようで見ることができるこの仕事を当たり前に思わず非常に恵まれているのだと思うようにしている。釧路湿原での調査中はコミミズクやケアシノスリが目の前を滑空し、何百年をかけて形成された高層湿原やコケが一面に広がり、タンチョウが羽ばたいている場面がしばしばみられる。おまけに四季によって植物が色を変えるので訪れるたびに美しく、日本人の少数しか入ることのできない場所でこの景色を見ていると思うとなんだか誇らしかった。



釧路湿原で出会ったケアシノスリ



釧路湿原で出会ったエゾシカ

ありがたいことに、研究室の教授は研究分野に関係する学生をシカ対策の検討会に同行させてくれた。検討会では必ずと言っていいほど、捕獲による個体数調整の必要性について議論され、それを強調するためにシカによる植生や鳥類への被害、土壌成分の改変に関する研究結果が説明されていた。釧路湿原にはたびたび調査で訪れており、先輩からも説明を受けていたため、事情は分かっていたつもりだったが、検討会で改めて定量的にシカの深刻な被害を説明されると、爆発的に増えすぎたシカは湿原の環境をものすごい速さで改変させ、それによって失った自然を取り戻せなくなりそうな状況は心を打つものがあった。自然淘汰されて無くなっていく現象に対しては仕方ないと思うのだが、人間が起因となって起きたシカ問題が原因で美しい自然が失われるのは、どうも納得がいかずいたたまれない気持ちになる。当時の私はシカを含む動物を殺処分する行為にどうしても抵抗があり、積極的になれなかったが、捕獲をしないと美しい湿原が失われるというジレンマに悩まされていた。そのころ、私はアルバイトとして民間の調査会社に働く機会をいただき、シカの捕獲補助をする仕事に多く従事した。特に冬場は、調査現場付近に借りた一軒家に滞在して集中的に働かせてもらい、働く中で学ぶ機会がとて多かった。調査会社の社員の方は私の捕殺に対する抵抗感を否定せず理解してくれて、「忘れてはいけない大切なことだ」とおっしゃってくれたのでひとまず安心したが、果たして捕殺をやる前からやらないと決めつけていいものかとも思っていた。そんな自問自答をしていた中、前日に仕掛けていた小型の囲いわなに親仔のシカが捕獲され、電殺器での殺処分が決まったため、私も自主的に参加した。「とりあえず、経験が大事だ」と考え直し、わなの設置現場に向かった。囲いわなに着くと、頑丈な囲いわなが壊れると思うほどシカが暴れだし、情けないが私は少し怖気づいてしまった。同行した調査員の方が丁寧に作業手順を説明してくれたので、冷静さを取り戻し、動物保定用のネットを

使って動きを止めて電気殺を実施した。思いのほか心理的ダメージが少なかったが、当然いい気分がする行為でもなかったのも、自分の感情は形容しがたい状況にもなっていた。先ほどまで囲いわなを飛び越える勢いで暴れまわっていたシカが今では一切動かなくなり、大きな音がなっていた囲いわなは静寂に包まれていて、数分前との差が激しい。科学的な根拠の基、殺処分する行為は正当な理由があるとはいえ、動物に対して重大な責任があるとひしひしと感じた日であり、その後、殺処分した個体を捌いて調理をしてエゾシカ肉のおいしさに驚いた日でもあった。今思うと、この時から野生動物を殺処分する行為に責任感を持ち始めた気がする。研究室やアルバイトを通じていくつかの調査を経験し、研究活動が面白くなってきていたときに、仕事としてやりたい職種がはっきりせず就職活動が停滞していた。それを見かねた研究室の教授の奨めもあって大学院への進学を決めた。当時、研究室は国内最大数を誇るシカのGPS発信器付き首輪のデータを保有しており、それも進学の手前だった。大学院ではGPS発信器付き首輪から得られた位置データを使ってシカの捕獲適地に関する研究がしたいと思い、大学院に入学してからはシカ関係の論文を読みつつ、その研究に必要な地理情報システム (GIS) やプログラミングの勉強をひたすらやっていた。あつという間に時間が過ぎていった。

大学院に入学して初めての夏、研究室の教授から呼び出された。教授からマレーシアで2か月間のインターンシップがあるから参加してみないかと言われ、悩むことなく了承した。特に明確な理由はなかったが、断る理由もなかったのもマレーシアで経験を積むことにした。教授や大学が素早く手続きをしてくれたおかげで、すぐさまマレーシアのサバ州にあるコタキナバルで生活することになり、現地の大学の日本人教授が丁寧に世話をしてくれた。コタキナバルは非常に陽気な方が多く、すべての物事に対してどうにかなるさの精神で生きているような印象だった。実際、サバ州

に住んでいる方はマレー語で「ボレバカラカウ」とよくおっしゃっていて、日本語で「大丈夫!!」という意味だが、何に対しても明るい感じで「ボレバカラカウ」と言っていた。滞在していた時期は乾季だったので蒸し暑さはなかったが、暴力的な日光が降り注ぎ、北海道とは比べ物にならない暑さだったが、本州で育った私には特に問題はなくすぐに順応できた。年中暑い代り映えしない天気とは打って変わって、動物の多様性が非常に高く、現地で動物図鑑を買うと多くの動物がいるため、哺乳類図鑑だけで広辞苑ぐらいの厚さになっていた。動物でいうと大学校内ではカニクイザルがうろついている姿が度々みられ、外のカフェテリアで大学生がテイクアウトしたハンバーガーをテーブルに置いて少し席を外すと、どこからかカニクイザルが現れて無音で盗んでいった場面を見たことがある。大学とハンバーガーショップは車でなかなか時間がかかる位置関係にあり、一瞬で昼ご飯を失った大学生の顔が不憫でならなかったが、私も代わりの食べ物を持ち合わせてなくて、話したこともなかった学生だったので助けてあげられず、明るいカフェテリアに悲壮感が漂ってしまった。視点を変えて考えてみると、このファーストフード盗難事件は、動物の住処と人間の生活環境が密接し、マレーシアでも人間と動物の間に軋轢が生じている証でもあった。

現地の大学の日本人教授がコーディネートをしてくれて、いろいろなインターンシップ活動を経験できたが、中でも衝撃的だったのはボルネオゾウの調査だった。コタキナバルより数百 km ほど東に行くと深い熱帯林に入るのだが、林道にはボルネオゾウの巨大な糞が所々に落ちているのが分かった。大きさを例えると、日本の林道に落ちている横幅 30cm ほどの落石ぐらいのサイズ感だった。まず、日本ではお目にかかることのないサイズ感の糞で初めのうちは珍しく感じたし感動もあったが、糞からそれを残したボルネオゾウのおおよそのサイズ感が容易に想像でき、それらが自分の生活圏内をうろついていると思うと恐怖でしか

なかった。現地の人にはよく平然と住み続けているなど尊敬の気持ちさえ抱いた。別日のインターンシッププログラムでは日本人教授のツテでワイルドライフレンジャーに同行し、ボルネオゾウの追い払いを見学できることになった。まず、被害現場の下見から始まった。被害現場は熱帯林に囲われた学校の校庭ぐらいの広さの開放地でその中に数件の高床式の家があった。レンジャーが話す言葉はわからなかったが、緊迫した空気から近くにボルネオゾウがうろついている状況がなんとなく察知できた。レンジャーは銃を持ちながら果敢に林縁まで近づき、拡声器を使って大声を出し威嚇を始めた。おそらく、マレー語で「帰ってください」的な文言をずっとしゃべっていたのだろう。レンジャーの威圧もあってか、とりあえずボルネオゾウが立ち去り危険性がなくなったと判断され、別の現場に移動した。あとから聞いた話では、ボルネオゾウが集落に出ると、通り道に建っている家を避けることなくそのまま歩くので、家は踏み壊されてしまうそうだ。仮に自分の家が動物に破壊されたらどう思うだろう。私は自分の財産を失った悲しみ、ボルネオゾウに対する憎しみや怒りを勝手に予想していたが、実際に被害にあった現地の方々の苦しみは第三者からは想像できないものであろう。別の現場ではしっかりと立派にそびえ立ったバナナの木がぐしゃぐしゃに折られ、木の繊維が痛々しく露出していた。そんな状況を見ると、実際に見た経験はないが、人間の住居もボルネオゾウに破壊されている状況が想定できてしまう。陽が落ち、あたりが暗くなったがレンジャーたちが集まって慌ただしくなってきた。どうやら現在車を停めている林道の数十メートル先にボルネオゾウの群れがいるようで、追い払いをしなければならぬ状況だった。確かに、レンジャーたちが照らしたライトの先を見ると、ボルネオゾウの目が自分の近くで動いているのが肉眼で見えた。別の現場と同じようにまずは拡声器を使って大声を出し威嚇をするが、あまり効果がなかったようで、トラックの荷台に積まれていたバズーカ

砲をレンジャーたちが持ってきた。漫画でしか見たことない大きさのバズーカ砲にレンジャーたちは何の合図もなく弾を詰めるので、私は急いで耳を塞いだ。その直後、轟くほどの音と衝撃が発生し、それが5回ほど繰り返され、やっとのことでボルネオゾウの群れが退散したようだった。実際、レンジャーたちは1日の中で複数の被害現場に行っては、上で説明したようにボルネオゾウの追い払い作業をしており、出勤件数や移動距離はもちろん、命の危険が常に伴うのでなかなか重たい作業内容だと思った。しかし、誰かが追い払いを続けなければ、住民への被害は増え、人間との軋轢が増えるとともに、ボルネオゾウへの負の感情が肥大化してしまう。現状として、ボルネオゾウと人間との軋轢の緩和が最善な方法であるのだと言い聞かせるようにしてこのプログラムは終了した。

ワイルドライフレンジャーに同行するプログラムを終えて、次はキナバタンガン州にある小さな村でボランティア活動をするために滞在することになった。その村には、エコツーリング活動を提供する団体があり、マレーシア国内外問わず各国からボランティア活動や自然体験活動に参加する旅行客が多かった。ボランティア活動はツル切りや、植林活動、センサーカメラ調査に参加し、日本人単独で滞在しているのが珍しかったのか活動の合間にも現地の人が良く話しかけてくれて不自由なく生活できていた。余談だが、私が滞在させてもらった小さな村は、かつて戦時中に日本兵が押し寄せて住民の首を刳って行ったそう。そんな悲惨な過去を持ちながら、住民の方は日本人に対して嫌悪感を抱かず普通に接してくれたことに感謝している。そして、住民の優しい態度の理由は私がかねてよりお世話になっていた民間企業や私の大学の教授たちが中心となり、支援プロジェクトを通して現地民と良好な関係を何十年も築き上げていたためであり、困難なく私が滞在できたことはその恩恵を受けたためだと十分に理解しなければならぬ。ある日、エコツーリング団体に



ボルネオゾウによってなぎ倒された木



ボルネオゾウの糞

所属するガイドの方が日程を調整してくれて、ネイピアグラスと呼ばれる植物を刈り取る作業に参加した。このネイピアグラスは河の横に密生し、2メートル以上の背丈がある植物で、刈ったネイピアグラスはボルネオゾウ保護施設に送り届けられ餌となる。保護施設に向かう車内で、現地の作業員の一人が突然話しかけてきて、「X JAPANを知っているか？」と質問してきた。私の世代ではないが知っていたので、「はい」と答えるとその人がお気に入りの曲があると言って「ENDLESS RAIN」を流してくれた。日本の曲は万国共通だと思いつつ、曲の影響もあってかみんな感傷的になり、曲が終わっても移動中の車内は誰もしゃべらなくなった。保護施設に着くと施設の管理者を紹介され、施設を案内してくれた。管理者によると、その施設で保護しているボルネオゾウは過去に人身被害を引き起こした個体で、時期が来たら別の場所に移送され放獣されるそう。施設には3頭のボルネオゾウがいたが、内1頭は私が檻に近づくと鼻息を荒げて長い鼻を振り回し、檻内を

怒りながら歩き回るようになった。それ以外の2頭は非常におとなしく、本当に人身被害を起こしたのかを疑いたくなるような性格だった。管理者の計らいで、檻内に入れてもらいおとなしいボルネオゾウにさきほど刈り取ったネイピアグラスを与える許可をいただいた。私が鼻先にネイピアグラスを持っていくと、ゆっくりだがものすごい力で奪い取っていった。いまだに感触として覚えているが、あの力強さを感じたとき、バナナの木をぐしゃぐしゃにし、住居も破壊するのはボルネオゾウにとってはたわいもない動作なのだろうと思ってしまった。貴重な体験を終えて保護施設から滞在先の町へ車で帰る途中に、アブラヤシの植林地内を通った。マレーシアに来た時からアブラヤシ農園は嫌でも目に入ったが、農園を遠目でしか見ておらずアブラヤシ農園の中に入ったのは初めてだった。知っている人がほとんどだと思うが、アブラヤシから生成されるパーム油は様々な製品に使用されており、世界的に需要がある。日本でもお菓子や洗剤、衣料品にも使われているが成分表示には植物性油と表記されるのみで、パーム油とは表示されないので聞きなれない方も多いと思う。アブラヤシの植栽は需要と雇用を満たし、ボルネオ半島の主要な資金源となっているが、無計画なアブラヤシ農園の拡大に起因して、森林は単一化され多様な生物が生活できなくなっている。また、乾燥化を引き起こして火災を発生させ、地層に溜まった数千年分の炭素が酸化して温室効果ガスとなり放出されるといったデメリットもあり、原生林が減ってアブラヤシ農園が広がる風景を見ると複雑な気持ちになる。日本ではアブラヤシ生産と似たような現状としてスギやヒノキの大規模植林があり材生産率向上のために、スギやヒノキの植林が進んだ過去があるが、根を深く下ろさないため地盤が緩みやすく地滑りが起きたり、花粉症を引き起こす原因になっており、ボルネオ半島のアブラヤシ産業の現状と少し重なってしまった。アブラヤシの生産をやめれば助かる自然が増えるが、農地で働いていた人々は失業し、国全体とし

て資金力が減ってしまうトレードオフのジレンマがそこにはあった。人間が生きるために自然を犠牲にしているが、果たして自然はどう思っているのか。共通言語を持たない相手に対する会話の仕方が分からずもどかしい。帰国してから改めて本を買ってボルネオ半島の現状を調べたが、アブラヤシ生産が引き起こす問題に気付かず、日本で平然と暮らしていた無知な自分が恥ずかしくなった。パーム油の消費国で生活する日本人が発生させた軋轢と言っても過言ではなく、日本人として自覚を持たないといけないと感じたきっかけでもあった。そして、アブラヤシ農園開発によって汚れた河川を見ながら、昔はもっときれいな河だったと教えてくれたマレーシア人自然ガイドの友達の表情は今でも忘れられない。



アブラヤシが伐採された跡地

マレーシアから帰国すると、自分の研究と学会活動に割く時間が増えあつという間に時間が過ぎていった。教授は私がシカの研究をしていて知識が偏りがちにならないように、外来種調査や普及啓発活動、動物園関係、JICA 研修など幅広く仕事を与えてくれたので、知識の幅が広がり別視点から物事を見るようになったのでありがたかった。この時に幅広く経験を積んだことが、野生動物管理に対する私の土台になっている。その後、私への指導は別の教授に引き継がれたが、積極的にコミュニケーションをとってくれて修士研究が続行できたのだが、実をいうと新しい教授は大学生の時にはエゾシカの生体捕獲を手取足取り教えてくれて、マレーシアに滞在していた時はインターン

シッププログラムをコーディネートしてくれた方だったので、面識があった。いつも親身になって私の話を傾聴してくれて、就職が決まったときも自分のことのように喜んでくれたので、私も嬉しかった。教授は野生動物管理の中でも人間と動物の関係性に関する Human Dimension という分野に力を入れており、まだ、日本では聞きなじみのない学問であった。人間と動物との軋轢もこの分野に含まれており、教授は民間企業で働いた経験から地域社会に貢献できるような野生動物管理を探求していらっしやう。この時、初めて「地域」という言葉が出てきたが、思い返せば学生の時に経験した野生動物管理は「地域」のために行われていたものばかりだった。地域の象徴である湿原をエゾシカから守りたい、地域の持続的維持のためにアブラヤシ生産を何とかしたい、地域の安全を守るためにボルネオゾウと共存したいなど枕詞のように「地域」がくっつく。「地域」という言葉だけ見ると漠然とした言葉ではあるが、多様な意味合いを含んで奥深く、卒業後は民間企業で野生動物管理に関する仕事をして地域社会に貢献しないといけない自分にとって非常に重要だった。「地域」の大事さを教えてくれたその教授は「肩の力を抜いてぼちぼち頑張りなさい」と言って私を送り出してくれた。

教授は私が就職する際に、これからはランドスケープ管理が非常に重要になると教えてくれた。当時の私は、ランドスケープという漠然かつ幅広い意味を持つ言葉を理解できず、野生動物管理にどう当てはまるのかが一切分かっていなかった。その教授はアメリカで長らく研究をしていたため、あちらの進んだ管理システムを知っていたから言えたのかもしれない。実際にアメリカの文献を読むと、ランドスケープという言葉が頻出しているので、なんとなく重要性は理解していたつもりだったし、そのあともランドスケープ管理という言葉が妙に頭に残った。民間企業の入社式の際、部長からのお言葉で野生動物管理の3本柱として「個体群管理」、「被害管理」、「生息環境管理」が

存在するが、「生息環境管理」が一向に進んでいない現状の説明をいただいた。その時、私の中では「ランドスケープ管理」と「生息環境管理」が妙につながり、野生動物によって消失した自然の回復や生息しやすい環境づくりをすれば生息環境管理に貢献し、最終的には自然景観が保たれると考えた。この出来事以来、「生息環境管理」を自分の中のテーマと目的として仕事に取り組むように意識し、フィールドに出たときは動植物や環境の変化を逃さないように観察するよう心がけている。特に鳥類のさえずりはなるべく聞くようにしており、シカが多い地域と少ない地域で比較するようにしている。鳥類の中でもヤブサメのさえずり状況がシカの密度によって大きく異なり、シカによって下層植生が衰退した森ではヤブサメのさえずりが一切聞こえなくなっていた。視覚的には健全な森に見えたのだが、別の視点から考えるとシカによる影響を大いに受けていたようで、これもシカによって失われた生息地の一つなのであろう。失われた生息地と言えば、三重県の大杉谷溪谷で見たシカによる自然環境被害は心を打つものがあった。溪谷沿いの林道を車で走ると、きれいな景観が目につくが、標高を上げて尾根を歩くと植生が単一化していた。また、土が乾燥して樹木の根が露出し、いたるところで土砂崩れが起きており、きれいな溪谷が失われていく最中だった。今までは、シカとそのほかの動物の関係性に注視してきたが、動物以外にもシカによって被害を受けるものがあると知った出来事であり、生息環境管理を進めるにあたってしなければならないことの幅広さに驚いてしまった。生息環境管理は、個体群管理や被害管理のように管理して達成した成果を評価することが難しく、今まで進まなかった背景がよくわかった。ただ、フィールドに出たときは、動物だけでなく、土壌状態、植物、地形を含めて多面的に生息地の特徴を捉えて、自分なりにその生息地を評価しようとする意識を持つきっかけにもなっている。

民間企業で仕事をするようになり、曲がりなり

にも野生動物管理のプロとして働くことになった。答えは人それぞれだが、何をもってプロと言えるのだろうか。学生時代の経験とベテラン調査員を観察して、プロとは1つの物事から得られる情報量の多さとその言語化だと私は思っている。研究室の教授はプレゼンをするときに1枚の写真を使って、永遠としゃべっていたことがある。動物によって引き起こされている問題を写真の中から正確に読み取り、現状を評価して、今後起こり得る事象について先行事例を交えながら論理的に話し、主観的に得た情報を的確に言語化していた。私も働いてから感じたのだが、特に現場で起きている問題を読み取る技術というのはとても難しく、過去の経験や先行事例の蓄積がなければ得られない情報が多い。一方、ベテランの調査員の方たちからは当たり前のように、この技術が垣間見え、その記憶力や洞察力の高さには驚かされてばかりだった。山での調査の後、しばしばみんなで雑談するのだが、前と比べてあの植物が少なくなった、今日はあの動物が見れなかった、植物相の改変や地質が変わったなど何気ない会話の中で、細かい情報が飛び交っていた。正直、よくそこまで見ているなど感心するばかりであった。それだけでなく、得られた情報から今後起こり得る危険性を把握し、後日、課題としてクライアントに提案していた場面にたびたび同行し、私は勝手にプロフェッショナルを感じていた。そして、プロの仕事として野生動物管理を担うと、学生時代でも感じたように人間と動物の軋轢がいたるところに存在し、地域で起きている問題がより詳細に大きく聞こえるようになった。ある意味、学生時代より地域に関わるようになり、野生動物被害に苦しむ人たちに近づけた証でもあるのだろう。そして地域住民の方とお話して、動物の調査をしていることや動物が多い場所を伝えると、とても感謝され私もうれしかった。一方、地域に近づけたとしても、私たちはその地域に定住して常に野生動物対策を実施できるわけではないので、獣害対策成果を地域に還元し、自立した地域社会の構築の手助けをし

なければならぬと思った。しかし、言葉では簡単に言えるのだが、「野生動物対策における自立した地域社会の構築の手助け」に対する最適解は、私が野生動物管理に関わったたった10年では明らかにできておらず、現在も地域社会に触れながら模索中である。

野生動物管理に出会ってから10年間の軌跡を断片的ではあるが、振り返ってみた。この10年間でも野生動物を取り巻く問題は多様化し、難しいと思う課題も増えた。ただ、学生時代の経験も含め、現場に必ずあったのは人間と動物の軋轢だった。私が各地でみた美しい自然と同等に、野生動物による軋轢に苦しむ人たちの表情や感情は、野生動物問題の規模にかかわらず、忘れられないほど印象的だった。野生動物によって故郷や家を失い、大切に育てた作物を荒らされ、時には親しんでいた自然が消えてしまったら自分はどうなるのだろうか。恐らく形容しがたい感情になって、茫然としてしまうだろうし、被害物に対して愛情があればあるほど、野生動物に対して負の感情を抱いてしまうだろう。野生動物の被害を受けながら地域に根強く住み続ける行動はとても偉大だと私は思う。都会にいれば、サルに作物を荒らされず、ゾウに住まいを破壊されることもなく、安定した生活が約束される。でも、都会の安定を担っているのは地域からの供給でもある。スーパーマーケットで購入できる食べ物の多くは、各地域で育てられた農作物だし、住居の材料も地域の林業業者が丁寧に伐採した木材を使用しているものがほとんどだろう。そのため、都会に住む私たちの生活は地域が支えているといっても過言ではない。だから、私は地域に寄り添い、科学的根拠に基づいて地域社会と野生動物の軋轢を解消し、自立した地域社会の構築のために地域の声を傾聴し努力したいと考えている。そして、自分自身の目標である「生息環境管理」を実現させ、日本の美しい自然景観を守れるよう尽力したのち、今回のようにまた振り返りができたらとても光栄である。